やまと万葉がたり

去年の春 逢へりし君に 恋ひにてし 桜の花は 迎へ来らしも

若宮年魚麻呂(巻八・一四三〇)

桜の花が見頃を迎えています。今回の歌は『万葉集』巻八、春雑歌に収められた一首です。「桜の花の歌一首 并せて短歌」という簡潔な題詞が付されており、主題が桜の花そのものであることが知られます。長歌一首(一四二九)と、今回掲載の短歌一首で一組になっています。

長歌では、男女の髪に飾られるように、桜の花が国の果てまで咲いている、と歌い、「桜の花の にほひはもあなに」と結びます。「にほひ」とは現在とは異なり、聴覚ではなく視覚で感じる美しさを意味します。「あなに」は感嘆の言葉で、『古事記』神話の中でイザナキ・イザナミが相互にほめ合う際の言葉としても記されています。長歌では広く国中の桜の美しさが歌われますが、短歌ではひとつの桜に焦点が絞られるようです。また長歌とは異なり、桜を擬人化しています。

とある桜の花は、前の年「君」に逢い、恋しく思いながら散ってしまったけれど、一年ぶりに再び咲き、恋しく思っていた「君」に逢うことができたようですよ、という歌です。この歌の「君」は宴会の主人かもしれません。桜に恋い慕われていたと表現することで、参加者が主人のことを讃える歌かと考えられます。

現実としてはむしろ、「君」の方が桜の咲くのを待っていたのでしょう。一年ぶりの桜の花を見ることができる喜ばしい気持ちを、あえて桜の側から歌うところにこの歌のおもしろさがあると思います。

この歌の作者は不明ですが、左注に「若宮年魚麻呂誦めり」と記されています。若宮年魚麻呂は他にも歌を暗誦していたことが記されており(巻三・三八九左注)、栢の枝の伝説をふまえた歌(巻三・三八七)なども作っています。人に擬える歌を好んだ歌人といえます。

(県立万葉文化館主任研究員・阪口由佳)

【訳】去年の春お逢いしたあなたに、一年を恋うて来た桜の花は、今こそお逢いできたらしいよ。

標結ひて わが定めてし 住吉の 浜の小松は 後もわが松

余明軍(巻三・三九四)

この歌は『万葉集』巻三、譬喩歌の部に収められた一首です。譬喩歌とはたとえを用いた歌で、恋心を歌うものが中心です。

住吉は松の名所で、今回の歌も直訳では松を歌っているようですが、愛しい人を松にたとえていると考えられます。「標」とは占有の目印です。自分のものとして標をつけた松はこの先も自分の松なのだ、ということは、女性をこの先も手放さないという意思表示になります。この歌より早い時期に作られたと見られる恋の歌に「後もわが妻」で閉じる歌があります(巻十一・二四二八)。この歌を参考にしたのかもしれません。

やまと 万葉がたり

『万葉集』はもともと漢字ばかりで書かれており、二句目「定めてし」の部分が「定義之」と書かれています。なぜ「義之」が「てし」と読めるのか、これは本居宣長の発見によります。王羲之(307~365)が高名な書家で、書家が「手師」であるという意にかけて「羲(義)之」と記したのだと指摘しました(『万葉集玉の小琴』など)。これが今では定説となっています。

作者の余明軍は大伴旅人の資人(従者)で、百済王族系の渡来人と考える説が有力です。今回の歌以外に『万葉集』に7首の歌を残し、うち5首は天平3年(731)7月、大伴旅人が亡くなった際の歌(巻三・四五四~八)です。左注には、資人の余明軍が犬馬のように旅人を慕い、心の悲嘆を歌った、と記されています。残る2首は旅人の子・大伴家持への歌(巻四・五七九~五八〇)です。今回の歌の題詞には「余明軍の歌一首」としか書かれませんが、旅人が大宰帥であった時期に大宰府の宴で詠まれたとする指摘もあります。余明軍と旅人・家持親子との結びつきがうかがえます。

(県立万葉文化館主任研究員・阪口由佳)

≪訳≫しるしを結んでわがものと決めておいた住吉の浜の小松は、後にも私の松だ。